

理事長メッセージ

～ 熊本県立大学理事長に就任して ～

私は愛媛県新居浜市に生まれ、中学・高校は松山にある愛光学園で学びました。また、中高の6年を寮ですごし、集団生活もこの時に学びました。

私は1968年に東京大学理科 I 類に入学しました。将来、何をしたいかということあまり考えず、成績もそれほど悪くないし、数学が好きだから、理科 I 類に行こう、その程度の考えでした。しかし、大学に入ってすぐにストが始まって授業もなく、読書と麻雀で一年間をすごしました。今から振り返ってみても、この時ほど、よく遊んだことはありません。

しかし、この時、こんなことをずっとやっていたはだめだ、という自覚も生まれました。そういう危機感もあって、授業が始まると、いろんなクラスに顔を出してみました。その時、わかったことは、数学が好きだということと数学の才能があるかどうかは全く違うということ、そして、実験は好きでないということでした。それもあって、2年の後期、教養学科国際関係論分科に進学しました。

国際関係論は一つの研究分野 (study) ではあっても、政治学、経済学、社会学、歴史といった専門 (discipline) ではありません。国際政治、国際経済、国際法、外交史などはそれぞれ、政治学、経済学、法学、歴史学などの一分野ですが、こういうものをすべて、できるだけ広く、学ぶこと、それが国際関係論を学ぶということだといわれました。それは、学生の方から見れば、国際的な問題に関わる限り、何をやっても良い、ということです。それが私の性に合っていたようです。国際政治、外交史、国際経済、マクロ経済から中国史、東南アジア史まで、どこまで理解したかは別として、ずいぶんいろいろな講義、セミナーに出ました。

そこで何人かの先生に出会いました。一人の先生からは、E. H. カー、カール・ドイッチ、カール・マルクス、マックス・ウェーバー、ゲオルグ・ジンメル、ジョン・フェアバンク、宮崎滔天など、政治学、経済学、社会学、歴史学の古典50冊のリストを与えられ、1年に10冊読んで、レポートを提出しました。もう一人の先生からは、ちょうどその頃、先生が実施していた日本の対中政策の研究プロジェクトの手伝いを頼まれ、一夏、国会図書館に通い、資料を集め、ノートを取り、先生の論文を手本に同じ手法でデータを分析し、レポートをまとめました。この時、社会科学的研究とはどういうものか、研究のおもしろさとはどんなことか、非常な充実感とともに学びました。

大学3年に進学した時、ある先生の勧めで TOEFL のテストを受けました。結果は惨憺たるもので、私の英語力はアメリカの大学の大学院に行くのに必要とされる最低水準をずっと下回る水準でした。それ以降、先生から毎月、英語の論文を1本読むよう、宿題をもらい、論文を読み、要約し、レポートにまとめる訓練をしました。その結果は驚くもので、一年で英文の本をずいぶん楽に読めるようになりました。また、英語学校に通い、1年後に受けた TOEFL テストでは、アメリカの大学院が要求する水準の英語力を身につけることもできました。

大きな高い建物を建てようとするれば、しっかりとした広い土台を作らなければなりません。今、振り返ってみて思うことは、私がどれほど大きく高い建物を建てたかはともかく、大学を卒業し、大学院に進学して、社会科学・地域研究の研究者の道を歩み始めるにあたって、何人か、本当に素晴らしい先生に出会い、その時には辛いこともありましたが、厳しく指導され、社会科学の諸分野におけるいくつかの基

本的な考え方、研究の作法、英語力をそれなりに身につけることができたというのは非常に幸運だったと思います。

皆さんの中には、大学でこれをしよう、あれを学ぼうと、しっかりした目的意識を持って大学生活を送っている人もいます。また、かつての私のように、特に目的意識もなく、適当に流そう、としている人もいます。しかし、大学ではぜひ、いろいろな先生のクラスをのぞいてください。大学にはいろいろな分野で活躍するいろいろな先生がいます。その中には、将来、この先生に出会えてよかった、と思う先生もいるはずです。また、今、皆さんが関心を持っていること以上に、もっと面白いことが見つかるかもしれません。そういう中で、ぜひ、しっかりとした、広い土台を作ってください。

平成 31 年（2019 年）4 月 8 日

熊本県立大学 理事長 白石 隆